

容器の身体性についての一考察

—Johnson (1987) と併せて—

神野 智久 (フリー)

1.はじめに

本発表は、発達心理学における知見をふまえ、容器の身体性に対し、一つの見解を提示することを目的としている。容器 (container) とは、内と外にわかれる境界線を有し、内容物の中に入れることができる種々の包含事象の総称であり、身体性とは、事象についての経験的理解である (cf. Johnson 1987)。

Johnson (1987 : 22) では、容器、乃至は包含事象の経験的理解が述べられており、それらは自然言語の分析に対しても非常に有益である (cf.拙稿 2017)。

そこで本発表では、まず、Johnson (1987) における容器の身体性についての分析を俯瞰し、それから発達心理学における知見を述べ、言語事実を挙げながら、発達心理学の現代中国語を主とした自然言語をどのように説明できるかを述べる。

このように論証することにより、本発表が主張する「容器の連続性」が、容器の身体性、すなわち包含事象に対する経験的理解として認められるのではないかと、ということを提案する。

2.先行研究

Johnson (1987) では、容器についての経験的理解が幾つか挙げられている。次の (1) を参照されたい

- (1) 包含された対象が観察者に見えるようになったり、見えなくなったりする。

(訳本 : 89)

- (1) に関連して、次例 (2) を参照されたい。

- (2) a.从早晨到下午, 太阳一会出来一会消失…… (《务虚笔记》)

(朝から午後まで太陽は出てきたり隠れたりして……)

- b.有的女学生把眼泪都笑出来了

(《1937 年的爱情》)

(笑って涙を出した女生徒もいた)

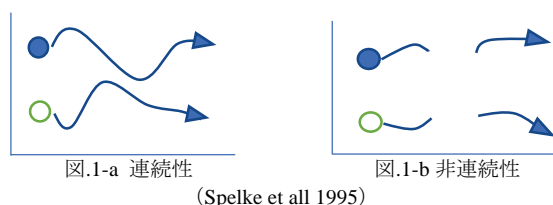
上例の“出来”は、隠れた状態から露わになった状態、または出現を表す派生義である (刘月华主编 (1998 : 234))。 (1) に基づくと、上例 (2) の“出来”の派生義の動機づけ

(motivation) は、(1) にあるように、「包含は対象を見えなくする」と説明可能である。

3.発達心理学における知見

次に発達心理学における知見を述べる。

スペルキ (Spelke) の研究では、物体の動きには、重力や慣性といった制約があることを、我々は乳幼児の段階から経験的に理解していることが明らかになっている (Spelke et all 1995)。それら制約の 1 つに、物体は時空間を飛び越えないという「連続性」 (continuity) が挙げられる。



乳児は、図.1-a のように移動の主体が繋がった経路を追跡し、図.1-b のように、時空間を超越することは起こりえないことを経験的に理解している¹⁾。このことを噛み砕いて理解すると、次のようになる。例えば、「太郎が 101 教室を出る」という事象は、「太郎が 101 教室に入る」という事象を前提として喚起する。というのも、太郎が時空間を超越し、忽然と教室の中にいる状態は想像し難いからである。反対に、「太郎が 101 教室に入る」という事象は、「太郎が 101 教室を出る」という事象を前提として喚起するとは必

ずしもない。この点において、「入る」と「出る」は非対称的である。本発表は、これを「容器の連続性」と名づけ、次のように定義づける。図.2 と共に参照されたい。

- (3) 容器の連続性：「対象が容器から出る」という事象は、「入る」という事象を前提として喚起するが、逆はその限りではないという、内外への移動の非対称に対する経験的理解。



図.2 内外への移動に見られる連続性

但し、「容器の連続性」は真理条件的ではない。それは、「3時に家を出て、コンビニに入り、電車に乗って…」のように、我々は常に内外への移動を繰り返しているからである。

(Johnson1987 : 30)。図.3 はその概略図である。

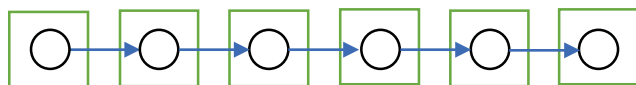


図.3 内外への移動

肝心なのは解釈 (construal)、つまり我々が内外への移動のどの範囲を切り取って見ているかである。それにより、内外への移動は、対称的にも、非対称的にも解釈される。この範囲の切り取りは、スコープ (scope) と言われている。言語の意味として特に必要となってくる部分をスコープといい、スコープの取り方次第で、言語の意味そのものが変わってくる (河上誓作 1996 : 21)。図.4-a のように、スコープで連続性を捨象することにより、内外への移動は対称的に、図.4-b のように、スコープで連続性を選択することにより、内外への移動は非対称的に解釈される。



図.4-a 内外への移動 [-連続性]



図.4-b 内外への移動 [+連続性]

4.言語事実—“進”と“出”の非対称性について

次に本節では言語事実を挙げる。現代中国語において、「入る/入れる」を意味する“进”²⁾と、「出る/出す」を意味する。“出”には、幾つか非対称性が観察される (拙稿 2017)³⁾

4.1 希薄化による意味拡張

まず一つ目は、希薄化 (bleaching) による意味拡張である。次例を参照されたい。

- (4) a. 穴から蛇が出てきた。
b. (X から) いい色が出てきた。
c. {月が/霧が} 出てきた。

(山梨正明 2000 : 143)

(4a) は、「穴から」という表現から明らかのように、問題の蛇がどこから出てきたのかの出所が前景化されている。これに対し、a から c の例にいくにしたがって、容器のイメージ・スキーマは相対的に背景化されている。このように、認知的際立ちが低くなることにより意味が拡張することを希薄化という (山梨正明 2000 : 143)。上例に挙げた日本語と同様に、中国語にも希薄化による意味拡張の事例が見られる。次の例を参照されたい。

- (5) a. 从来没出过北京。
(今まで北京から出たことがない。)
b. 问题又出来了。
(問題がまた発生した。)
c. 天空出了一道彩虹。
(空に虹が出た。)

『白水社 中国語辞典』

しかし、「出る」や“出”の対義語である、「入る」や“進”には、希薄化による意味拡張は見られない。

4.2 有標と無標

- (6) a. 一只麻雀飞[屋子里][去了]。
 飛ぶ [部屋の中] (孟琮等 1999 : 132)
- b. 所有人眼睁睁看着他掉进 (→掉) 了[洞里]。
 落ちる+入る [穴の中]
 (《陆犯焉识》)
- c. 我捏了两块放[嘴里] (《圈里圈外》)
 放る [口の中]
- (7) a. 自己一阵风似地跑出 (→*跑) 了[会议室]。
 走る+出る [会議室]
 (《河岸》)
- b. 笋尖便会猝不及防地钻出 (→*钻) [地面]。
 もぐる+出る [地面]
 (《黄雀记》)
- c. 蒋丽莉抢先出了[教室], 头不回地往前走。
 出る [教室] 《长恨歌》

(6abc) のように、これら動詞に組み合わせる場所は、着点に解釈され、それは“進”の有無に影響はない。しかし、起点と解釈するためには、“出”を動詞に付随させるか (7ab)、“出”を単独で用いる必要がある (7c)。

よって、“進”は無標、“出”は有標であると言える。

4.3 場所との共起関係

- (8) a. 着点：春桃把水泼掉，理着头发进[屋里]来，坐在李茂对面。《春桃》 入る [部屋の中]
- b. 起点：他走进[教室里]来。
 入る [教室の中]
 (*場所を起点と解釈することは不可能)

- (9) a. 着点：我也莫名其妙地放下碗筷，和大家一起跑出[门外]。

出る [門の外]

《男人的一半是女人》

- b. 着点：白天不能走出[外面]。

歩く+出る [外] 《春风沉醉的晚上》

- c. 起点：他已经出了[院子], 从土坡下来了。

出る [庭] 《平凡的世界》

上例 (8b) のように、“進”は起点と共起することができず、(8ab) のように、移動動詞に組み合わせる場所は、すべて着点に解釈される。動詞に続く場所が起点と解釈するためには、“出”を動詞に付随させるか (9ab)、“出”を単独で用いる必要がある (9c)。

5. 分析

前節で挙げた言語事実からまとめられる課題は次のようになる。

課題Ⅰ：“進”は、なぜ希薄化による意味拡張が起こらないのか。

課題Ⅱ：“進”と“出”は、なぜ無標・有標の関係にあるのか。

課題Ⅲ：“進”は、なぜ起点と共起不可なのか。

これらを、(3) で提案した「容器の連続性」から分析していく。

5.1 希薄化について

課題Ⅰでは、希薄化の意味拡張について触れた。希薄化の意味拡張について、先行研究では認知的際立ちが低くなるのが理由として述べられている。認知的際立ちが低くなるのは、内から外への移動における場所が旧情報であることによることが考えられる。先に述べたように、「内から外への移動」は、前提事象である「外から内への移動」を喚起するが、逆はその限りではない。そのため、「外から内への移動」には希薄化が起こらないのである。次の図を参

照されたい。

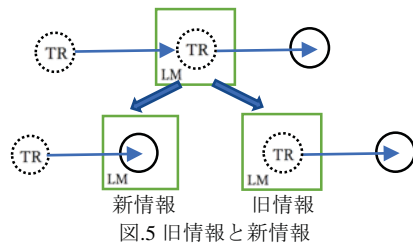


図.5 旧情報と新情報

5.2 有標・無標について

このような前提の有無は、有標・無標にも関係する。次例を参照されたい。

(10) a.我（是 / 0）日本人。

（私は日本人です）

b.我（不是 / *不）中国人。

（私は中国人ではありません。）

中国語では、肯定文（10a）における繫辞

（copula）の“是”はゼロ形式で表示可能であるが、否定文（9b）ではそれが不可能である。沈家煊（1999：40）では、「否定文は、相応する肯定文を前提とする」と述べられている。つまり、繫辞の有無に見られる肯定文と否定文の非対称性は、相応する事象を前提とするかどうかに関係づけられる。これを本発表の分析に類推的に当てはめると、「内から外への移動」は、「外から内への移動」を前提とするため、“出”は“進”に比して有標になる。

5.3 場所との共起について

「内から外への移動」は、前提事象「外から内への移動」を喚起するため、“出”は、起点・着点共に共起可能だが、「内から外への移動」は、「外から内への移動」を前提事象として喚起しないため、“進”は起点を喚起せず、起点と共起不可なのである。



図.6 喚起

以上挙げた3種の言語現象は、(3)の容器の連続性から分析できることから、容器の連続性は、容器の身体性の一つとして見做せることが考えられる。

6.おわりに

一つの事象、或いは事象の類型は繰り返し生起することにより、定着（entrenched）する（cf.Langacker 1987：100）。言語の非対称性とは、非対称的な経験の表象である。つまり、「内から外への移動」は、「外から内への移動」を前提として喚起するが、逆はその限りではないという非対称的な経験が繰り返し起こり、定着して、それがスコープによって切り取られることが考えられる。

脚注

- 1) 乳幼児を対象に行われた具体的な計測としては、Spelke 1995b が挙げられる
- 2) 中に入ることを表す動詞には、他にも“入”があるが、“入”は語彙的複合動詞しか形成せず、統語的複合動詞は形成しないので、本発表からは除外した。
- 3) 本発表で挙げる言語現象は、汎言語的だと思われる。詳しくは、池上嘉彦（1981）を参照されたい。

参考文献

- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学—言語とタイプロジーへの試論』大修館書店
- 河上哲作（1996）『認知言語学の基礎』研究社
- 神野智久（2017）『現代中国語における内外への変化事象に見られる非対称性の認知言語学的研究—「移動」・「存在」事象を併せて—』大東文化大学学位論文
- 且直子（2004）『認知発達』『認知科学への招待—心の研究のおもしろさに迫る』研究社
- 山梨正明（2000）『認知言語学原理』くろしお出版
- 刘月华主编（1998）《趋向补语通释》北京语言文化大学出版社
- 孟琮等（1999）《汉语动词用法词典》商务印书馆
- 沈家煊（1999）《不对称和标记论》江西教育出版社
- Johnson, M. 1987. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Univ. of Chicago Press. (菅野盾樹・中村雅之訳.1991.『心のなかの身体—想像力へのパラダイム転換』紀伊國屋書店)
- Spelke E.S., Philips, A., & Woodward, A.L. 1995a Infants' knowledge of object motion and human action. In D.Sperber, D.Premack, & A.J.Premack
- Elizabeth S. Spelke & Roberta Kestenbaum & Daniel J. Simons & Debra Wein 1995b Spatiotemporal continuity, smoothness of motion and object identity in infancy *British Journal of Developmental Psychology* Volume13, Issue2 Pages 113-142